

## フランスの口承文芸研究

長野 晃子

フランスの民間説話研究は古い伝統を持っている。一九世紀に入り、『グリム昔話集』が出現し、それは世界の、まずヨーロッパ諸国の民間説話、とりわけ昔話の採集と学問的研究を促したのであるが、フランスは、採集・研究両面で、ノルウェー、デンマーク、ロシア、スコットランド、ポーランド、ハンガリー、ギリシャ等、他のヨーロッパ諸国よりやや遅れて出発している。

採集面で、本格的に近い採話集を最初に出したのはセナック・モンロー Cnaec-Moncaut の、『ガスコニエの昔話 Contes Populaires de Gascogne』を一八六一年に上梓している。続いて一八六二年、ウジェーヌ・ボーヴェユ Eugène Beauvois が、『ラ・コート・ドールで採集した話を』ノルウェー、フィンランド及びブルゴーニュの昔話 Contes populaires de la Norvège, de la Finlande et de la Bourgogne』と題する自著の中に収め、フランソワ・マリイ・リュゼル François-Marie Luzel が、その第一話集『ブルターニエの昔話 Contes bretons』を一八七〇年に出版している。リュゼルのこの話集こそ

は、まさに真に学問的な価値のある、本格的な採話記録話集の最初のものであるが、この話集が出版された一八七〇年は、フランスで本物の民間伝承話の研究が始まった年でもある。

この年、一八七〇年に、『ケルト誌 la Revue Celtique』、『ロマンス語誌 la Revue des Langues Romanes』が創刊され、続いて『ロマニア Romania』誌が一八七二年に、『メリュジーヌ Melusine』誌が一八七七年に創刊され、忠実に採集し、忠実に記録しようとの努力がなされ始めた、まだ民衆の間で生きている民間伝承話の採集成果が続々と誌上に発表され始め、その結果、ロマンス語、ケルト学、言語学、民族学等、多分野の専門家たちが口承文芸に興味を持ち始め、誌上に論文を発表しはじめたのである。やや遅れて、ポール・セビヨ Paul Sebilot により、『民間伝承誌 la Revue des Traditions populaires』が一八八八年に創刊されるが、セビヨの疲れを知らぬ熱意により、三四年間刊行され続けた『民間伝承誌』は、今日でも貴重な採集資料話、研究業績の貯蔵庫、宝庫となっている。ほぼ時期を同じくして、『伝承誌 la Tradition』(一八八七—一九〇七)、『フランス及び外国の伝統 la Revue Traditionnisme Français et Etrangère』誌(一八九八—一九一四)も創刊されている。

一方、出版社も、優れた専門家によって採集された話の話集の出版を開始し、メゾヌーヴ社 Maisonneuve が、一八八三年から一九〇三年にかけて、四七巻からなる『世界の民話 Les Littératures Populaires de Toutes Les Nations』叢書を出し、ルルー社 Leroux 社が、一八八一年以来、四四巻からなる『民話・民謡 Contes et Chansons Populaires』叢書を企画している。

メゾヌーヴ社の「世界の民話」叢書には、セビヨ *Sébillot*(P.) の『高ブルターニユの口承文学 *Littérature orale de la Haute-Bretagne*』(一八八二)・リュゼル *Luzel*(F.-M.) の『低ブルターニユのキリスト教伝説 *Légendes chrétiennes de la Basse-Bretagne*』(一八八二)・セビヨの『高ブルターニユの伝承と俗信 *Traditions et superstitions de la Haute-Bretagne*』(一八八二)・フルーリー *Fleury*(J.) の『低ノルマンディーの口承文学 *Littérature orale de la Basse-Normandie*』(一八八三)・セビヨの民間伝承の中のガルガン *Gargantua dans les traditions populaires*』(一八八三)・カル *Carroy*(E. H.) の『ピカルディーの口承文学 *Littérature orale de la Picardie*』(一八八二)・ロラン *Rolland*(F.) の『童言葉と童戯 *Rimes et Jeux de l'Enfance*』(一八八三)・ヴァンソン *Vinson*(J.) の『バスクのフォークロフ *Le Folk-lore du Pays Basque*』(一八八三)・オルトリ *Ortoli*(J. B. F.) の『コルシカ島の民話 *Les Contes Populaires de l'île de Corse*』(一八八三)・ブラデ *Bladet*(J. F.) の『ガスコニユの民話 *Contes populaires de la Gascogne*』(一八八五)・セビヨの『高ブルターニユの民俗 *Contumes populaires de la Haute-Bretagne*』(一八八六)・リュゼルの『低ブルターニユの民話 *Contes Populaires de la Basse-Bretagne*』(一八八七)・ソーヴェ *Sauvé*(L. F.) の『高ヴォージュのフォークロフ *Le Folk-lore des Hautes-Vosges*』(一八八八)・セビヨの『オーヴェルニユの口承文学 *Littérature de l'Auvergne*』(一八九八)・ド・ラ・サル *De La Salle*(L.) の『 Berry の昔 *le Berry*』(一八七五・一九〇〇)・オラン *Orain*(A.) の『イール・エ・ヴィレーヌの民話 *Contes de l'Ille-et-Vilaine*』

(一九〇二)等がある。これらはいずれを取っても、非常に質の高い民話・民俗資料集であり、今日でも民間説話研究に不可欠な最良の資料集としてとどまっている。また、これらの話集の序文、解説、注記は、話型、話者、伝承状況などの、高度の研究報告・論文といつても過言ではない。また、ルルー社の「民話・民話」叢書には、ピノー *Pineau*(L.) の『ポワトゥワの民話 *Les Contes Populaires du Poitou*』(一八九一)・アンドゥリュース *Andrews*(J. B.) の『リグリアの民話 *Contes Ligures*』(一八九五)等が収められている。

このように採集され、出版された資料話を使って、どのような研究がなされたかという点、まず文学的研究がなされている。ガストン・パリス *Gaston Paris*、ジョゼフ・ベディエ *Joseph Bédier*、レオポール・スュードゥル *Leopold Sude*、ジエテオン・ユエ *Gédéon Huét* 等がフランス中世文学研究、アンリ・ゲドール *Henri Gaidoz* がケルト文学研究の分野で新境地を開いている。民間説話そのものの研究は、エマニユエル・コスカン *Emmanuel Cosquin* によって開始される。コスカンは、熱烈なインディアニストであったために、多くの研究において、常にインドの類話との関係をおくことを忘れなかったにもかかわらず、世界中の民話に関する幅広い知識、比較の適切さ、推論の学問的厳密さによって、いまでも、昔話の優れた世界的学者の一人に数えられているが、現在でも高く評価されている比較研究が注として各話(自ら採集したもの)に付されている『ロレーヌの民話 *Contes Populaires de Lorraine*』を一八八六年に出版し、多くの研究誌に発表した数多くの論文は、『フォークロフ研究

Etudes folkloriques』(一九二二)、『インドの説話と西洋 Les Contes indiens et l'Occident』(一九二二)にまとめられ、死後出版されている。当然のことながら、この時代には、コスカン以外にも多くのフランスの研究者たちがインド学派的の研究に熱中している。そして、神話学派、人類学派の研究も多くなされている。しかしフランスでは、このようにインド学派、神話学派、人類学派といった既成の学派に加担し、そのなかで研究を行って、部分的修正、発展を加えて行く研究者の傍らに、既成の学派の理論を厳しく検討し、声高に批判する研究者もいたことを忘れてはならないであろう。先に、文学派の中に数えたゲドーが神話学派を、ジョゼフ・ペディエは神話学派、インド学派、人類学派の民間説話の起源に関する理論を痛烈に批判し、ほぼ再起不能にしたことはよく知られている。およそこの頃までが、フランスの民間説話研究の黄金時代といわれている。

この黄金時代が、第一次世界大戦と、コスカンの死(一九一八)と、セビヨの死(一九一九)と、セビヨの死による「民間伝承誌」の廃刊(一九一九)、ペディエが与えた決定的な打撃等が主な要因となつて、終息する。

その後約五十年間、アルノルド・ヴァン・ジェネップ Arnold Van Gennep を除いて、民間伝承研究に興味を示したものは事実上皆無となる。ジェネップのみは、「メルキュール・ドゥ・フランス Mercure de France」誌の月評欄で、口承文芸を取り上げ続け、出版される話集を手加減せずに批評し、厳守されるべき規則を相起さ

せ、外国でなされている仕事の重要性を説いていた。

第二次世界大戦後、一九四六年に、「フランス民族学会 La Société d'Ethnographie」が創設され、その中で数人の研究者達がより集り、フランスの民間伝承話の採集・研究が再開されることになる。

この時期には、アリアヌ・ドゥ・フェリス Ariane de Felice がベリー・ベリー、ポワトゥール・ポトウ、オートゥール・ブルターニュで採話し、ジュヌヴィエーヴ・ブシニエ Geneviève Massignon がフランス西部で、モーガール Gaston Maugard がピレネーで、シャルル・ジョワスタン Charles Jostan がアルプスで、その他多くの人々によって、各地で採話が行なわれた。

しかしこの口承文芸復興期に、最も注目すべき仕事をなしたのはポール・ドゥラリュ Paul Delarue であろう。ドゥラリュの業績の最たるものは、フランスの民間伝承話の分類目録の作成である。民間説話研究にとって、最も基本的なことは、いうまでもなく説話を出来得る限り数多く採集することと共に、集めた説話を分類し、採集話を網羅する目録を作成することである。フランスでこの仕事を中心になつて推進したのがドゥラリュである。晩年、フランス民族学会副会長でもあつたドゥラリュは、マリールイーズ・テネーズ Marie-Louise Ténèze 始め、若い学者・研究者を指導しつつ、驚くべき熱意をもつて仕事を推進し、世界でも屈指の極めて緻密な分類目録の作成を開始した。分類方法はアールネルトンブソン方式であり、従つて話型番号は A T 番号である。題名はペロー Perrault、オーノフ Aulroy、ボーモン Beaumont 等により、フランスで慣用題名となっているもの、または民間で最も広く通用する通り名になつ

ているもの。フランスで傳承されている題名がない場合には、フランスの話の内容に適合すればアールネイトンプソンの題名、そうでない場合には、主としてドゥラリュを中心とする研究者達により、適宜選択されたものである。分類目録は『フランスの民間説話』(Contes Populaires Français)と題され、ドゥラリュの死後一年たつて、第一巻が上梓された。第一巻には本格(魔法)昔話A T三〇〇番からA T三六六番までが収録されている。あまりに早すぎたドゥラリュの死、プロップのヨーロッパへの紹介、アールネイトンプソン方式の分類批判等、いくつかの理由が重なり、第二巻以後の出版は非常に遅れるが、第二巻は一九六四年に刊行され、A T四〇〇番からA T七三六番までを収録し、第三巻は一九七六年に刊行され、A T一番からA T二九五番までを収録し、第四巻は一九八五年に刊行され、A T七五〇番からA T八四四番までを収録している。第三巻、第四巻は巻末に、アールネイトンプソン方式で分類できない話の頃をもうけ、マリールイズ・テネーズが、第三巻には八九頁に及ぶ「動物昔話」とは何か、第四巻には一一〇頁に及ぶ「宗教的物語」とは何か、を考察する論文をよせ、アールネイトンプソン分類方式の再検討を試みている。

このようにフランスの民間伝承話の分類目録作成を開始し、そのためにも他のフランスの民間伝承話研究者達を組織し、採集・研究を再び盛んにすることに預つて力のあつたドゥラリュは、目録作成以外にも、「フランス各州の昔話Contes merveilleux des Provinces de France」叢書(エラスムErasme社)を企画し、生前、フェリスFelice(A.)オートトゥールターニユ(一九五四)、カディック

Cadic(H.)の低プルトターニユ(一九五五)、モーガールMaugard(G.)のピレネー(一九五五)、メラヴィルMerraville(M. A.)のオーヴェルニユ(一九五六)の出版にこぎつけている。残念なことにこの叢書は、ドゥラリュの死とともに途絶えてしまつてゐる。研究としては、ドゥラリュは、ペローの昔話と民間伝承話を比較し、ペローの再話の過程と技法を研究し、その他にも広く文学と民間伝承話の関係を研究している。

ドゥラリュ以外には、この時期に、どのような研究者達がいかなる研究をしていたか概観してみると、アリアーヌ・ドゥ・フェリスが昔話の文体論及び語り手が話に及ぼす影響の研究、ジュヌヴィエーヴ・マシニョンが言語学的研究、ピエール・プロシオンPierre Brochonが行商人文学とその民間伝承話への影響の研究等をしてゐる。

行商人文学というのは、一六世紀から一九世紀にかけて行商人が戸別訪問して売り歩いた小型本である。この行商人文学はややもすると軽視されがちなのであるが、民間説話の口承・書承の問題を考へる際、非常に重要になってくるので、ごく簡単に紹介してみよう。一七世紀初頭、トゥロワの出版屋兼印刷屋が小さな(手のひら

大)、時として七〇ページにも満たない本を作ろうと思つた。表紙は粗悪な青い紙(ここから青表紙文庫、青色昔話(≡妖精物語)の名が出てゐる)で、ざらざらの紙にすりへつた活字で印刷したものだつた。それを呼売り人がたつたの一スーク二スードで売つた。その成功はものすごく、この企画はトゥロワの同業者だけでなく、フランスのほとんど全ての大都市の印刷屋に真似された。ロベ

ル・マンドゥルー Robert Mandrou の調査によると、トゥロワで出版された冊子の表題だけでも四五〇あるという。分類して一番多いのが信仰の書（聖者の伝説的伝記）、次がアルマナック（予言年鑑曆、日本の高島易断神宮曆によく似たもの）、カランドウリエ（いわゆるカレンダー）、それから昔話、神秘学（呪の本等）、短い一寸した小説、歌謡、伝説的フランス史、技術書、教養書（家庭の医学のようなもの）。内容から見ると超自然を特別に好み、逃避の文学である。昔話・伝説はいうまでもなく、その他の書も占星術、奇蹟にもつぱら頼っている。この青表紙文学の驚くべき特長は、全て既に印刷されているものの剽窃、焼き直しであることである。これらの本は既に出版されている本から自由に剽窃し、手を入れ、印刷屋自身によって書かれたものである。昔話に関しては、一番人気があり、一番よく青表紙本に印刷されたのは、ペローの話集から「シンデレラ」、「青ひげ」、「長靴を履いた猫」等、オーノワのものから「玩具」、「ベっぴんさん」、「青い鳥」等、ゴメスの「カレのジャン」等、また中世初期からヨーロッパに紹介されている東洋の昔話の翻訳から「アラジン」、「四〇人の盗賊」等。より新しく入った外国のものでは「フォルテユナトゥスの物語」等。伝説の場合には、一二、一三世紀の武勳詩の、といっても原典からではなく、既に短くされ印刷されている散文のもの、要約、抜萃であり、ほとんどシャルルマーニュ系統のもの（「エモンの四人息子」、「生き返ったガレノス」、「エオン・ドゥ・ボルドー」等）である。これら伝説に於ても超自然が好まれ、また、時代の現実と読者の社会的環境に反して、貴族の神話化が好まれている。騎士道精神ののつとつた全ての伝統的美

徳を持つ貴族が主人公で、名誉を重んじ、正義の味方、圧制に苦しむ民衆の味方、キリスト教の擁護者である。青色昔話と伝説の中間のものとしては、ガルガンチュワ、いたずらティル、フォルテユナトゥス等を主人公とする冒険ものが好まれ、ガルガンチュワはラブレ、いたずらティルとフォルテユナトゥスは一六世紀のフランス語訳をもととしている。なお読者の好み、注文は、呼売り人によって常に印刷屋に持ちこまれ、その結果、信仰の書にまで超自然を多く持ち込むことになり、教会があまりにも迷信の臭がするとして、このような聖者信仰を一掃しようとした時代であるにも拘らず、中世の全ての聖者の一生は奇蹟に満ち溢れた。呼売り人文学の繁栄は大革命によっても衰えることなく、一九世紀半ばまで続いた。（一九世紀に入ると内容の傾向が少し変わり、例えば登場人物としては、ナポレオンが好んでとりあげられたりしているが）。

この行商人文学の民間伝承話に及ぼした影響についての興味深い研究をピエール・プロシオンは「一六世紀以来のフランスにおける行商人文学——その文学と読者」と題する本にまとめ、一九五四年に出版している。

この時期に民間伝承話研究の主たる拠り所となったのは、フランス民族学会及びその機関誌、「民間芸術と民間伝承 Arts et traditions Populaires」（一九五三）である。これはそれ以前に刊行されていた、いずれも民族学会の機関誌である「新民間伝承誌 [La Nouvelle revue des traditions Populaires]」（一九四九—一九五〇）、「フランス民族学月報 Le Mois d'éthnographie française」（一九四七—一九五二）を合わせ吸収し、装いを新たにしたものである。この

時期以来、財政的負担は、国立科学研究所を通して、フランス政府によってなされ始めている。

この第二次黄金時代といえる時期も、ドゥラリュの死とともに勢いを失う。この衰えかけた勢いが再び盛り返すのは一九七〇年代後半を待たねばならないが、しかしこの一五年間にも、多くの研究者たちによって、細々とながら、地道な採集、研究が行なわれている。採集面では、シャルル・ジョワスタン Charles Jostan がアリエージュ、ドーフィネ、クロード・セニョル Claude Signolle がギューイエンス、ポール・ラヴェルニユ Paule Laverne がイソワール (ピュイ・ドゥ・ドーム県)、フェルナン・グリッパ Fernand Guiffé がゼランドゥ (ロワール・アトゥランティック県)、カミーユ・ガニョン Camille Gagnon がブルボネ、ベルナル・エデーヌ Bernard Edeline がソローニユ、ジャン・ドゥルイエ Jean Drouillet がニヴェルネとモルヴァン、マルセル・デルパストゥル Marcelle Delpas-Dé がリムーザン等で採話し、それぞれの採集集を刊行している。またこの時期にはメゾヌーヴ社が『世界の民話』叢書を再版し(一九六七・六八)、七十年代後半には、第一次、第二次黄金時代に採集された話を編集した、各州別の民話集が、チュール Tchou 社、ルネッサンス Renaissance 社から出版された。これは民間説話そのものにとつても、民間説話の研究にとつても、大きな意義を持つもののように思われる。

ちょうどこの頃、フランス政府もやっとその重い腰をあげ、国家的事業として、キューイズニエ Jean Cuisenier 等の学者の指導のもと

に、大々的にフランス全土の口承話の調査、採集を開始したのである。その成果が、ガリマール社の『世間話と昔話 Recits & Contes Populaires』叢書に盛り込まれている。この叢書は一九七八年から八一年にかけて、二八冊刊行されている。地方により、編者により、各巻の趣きはかなり異なるが、一九六八年頃から一九七八年頃にかけて、新たに採集された話が、数は少ないとはいえ光彩を放っている。また過去に採話された話で、これまで未発表だった話、各地の地誌、年鑑、<sup>エミ</sup>曆などに発表されただけで、一般にはあまり知られていなかった話なども採録されている。最近出版された採集集で注目に値いすると思われるのは、ルネ・ミニリ René Minery の『スングーのひとくち話 Le Sundgau - à travers ses anecdotes』(一九八五)である。アルザス州、ミュルーズ近郊の小さな村でいまだに語りつがれているひとくち話の採集集であるが、ぞつとずつと語りつがれず話、まさかとあきれる話、男性が喜び女性が顔を赤らめる話、あだなの由来等に混って、ひと口話化してしまった昔話がかかり混っていることに気づく。

研究面では、アールネルトンブソンの分類方法を深く学び、これまでの研究の流れに沿って、地理・歴史的方法論に基づく研究が続けられる一方で、ウラジミール・プロップが一九二八年に著した『昔話の形態学』の英訳が一九五八年にフランスにも紹介され(仏訳は一九六五年である)、それに対するクロード・レヴィ・ストゥロースの反応が早くも一九六〇年に『構造と形態——ウラジミール・プロップの著書に関する考察: Structure et forme』Réflexions sur un ouvrage de Vladimir Propp』として発表され、か『野性の

『思考 La Pensée Sauvage』が一九六二年に発表されるに及び、フランスにおける口承文芸研究は一時ほぼ完全に麻痺するに至る。レヴィ・ストゥロースは、ソシエールに淵源する構造言語学の新しい方法を文化人類学の領域に導入したのであり、自らは「構造主義は方法であって、思想ではない」とのべているのであるが、人間の外部に独立して存在しながら人間を支配しているシステムへの関心と、従来の歴史主義的な人文科学の方法への鋭い批判とをあきらかにしているレヴィ・ストゥロースの主張は、非常に新鮮でかつ強烈な思想的影響を及ぼすに至り、他の学問分野におけると同じく、口承文芸研究分野でも、それまでの研究方法にのっとった研究の続行がほぼ不能という状態に追いこまれる。以後研究者達は、プロップの形態論と、レヴィ・ストゥロースの構造論をめぐって研究を重ね、一九六〇年後半頃からその成果が続々と発表され始める。

口承文芸研究の分野では、やはりプロップの影響はより大きく、プロップ学派が、メルチンスキー等によるその後の発展も加えて、フランスにおける説話研究のいわば基準点、合流点になっている。全く異なる分析方法、さらには全く正反対の分析方法を研究する研究者達さえも合流させる一種の座標軸となっている。従っていかなる観点からなされた研究も、即ち説話の文化的研究、社会的研究、言語的研究、その他全ての分野の研究も、プロップとレヴィ・ストゥロースの影響ぬきには語れないのであるが、しかし中でもとりわけプロップとレヴィ・ストゥロースの影響を強く受けている分野、この二者に触発されてなされた研究分野から概観してみよう。それは勿論、昔話の構造分析の分野である。

説話の普遍的な規則を発見しようと、説話の構成の必然性を明らかにしようとする、説話の構成の中にある論理の研究が、最近まで、非常に盛んになされている。もっとも最近多少沈静化しているが。この分野で特に著名な研究者が、アルジルダ・ジュリアン・グレマス *Agaldas Julien Greimas* とクロード・ブレモン *Claude Bremond* である。グレマスには、「構造意味論——方法の探究 *Semantique structurale—Recherche de methode*」(一九六六)、「意味——記号の試み *Du Sens—Essais semiotiques*」(一九七〇)の著があり、ブレモンには、『フランスの民間説話の形態論 *Morphology of the French Folktales*』(一九七〇)、「策略のインデックスにおけるモチーフの取り扱ひ *Traitement des motifs dans un index des ruses*』(一九八二)、ドゥニーズ・ポーム *Denise Paulme* との共同研究)等の論文がある。ブレモンは約二〇話のフランスの昔話を対象にして研究し、プロップの学説そのものの発展を旨とし、グレマスはプロップの形態論とレヴィ・ストゥロースの神話構造論とを統合する方向を旨としている。グレマス、ブレモン等は、形態の執拗な研究の結果として、機能の論理的連関に基づく、新しい概念による索引、即ち新しい分類を試みている。

その他この分野ではドゥニーズ・ポームが、『アフリカの昔話の形態論 *Morphologie du Conte africain*』(一九七二)、『裏切り者をめぐるアフリカの昔話の類型学 *Typologie des Contes africains du decepteur*』(一九七五)、『鳥もちを塗られた彫像——昔話の一モチーフとそのアフリカでの変化 *La statue enduite de glu—un motif de Conte et ses avatars africains*』(一九八二)等の論文を発表して

る。また、仇討ち譚の中で主人公の手下が次々に現われる。その出現の連続・継起の論理的理由を明らかにしようとする研究（モーリス・ロヨール Maurice Coyaud『仇討ち譚 Histoire de vengences』一九八二）、語りの単位の組み合わせを支配する総則を導き出そうとする研究（ステラ・ロンゴ Stella Longo『AT III 三番のアルゼンチンで発見された類話の分析 L'analyse des versions trouvées en Argentine du Conte-type 313』一九八二）等、多数のかなり興味深い研究がなされている。またこの分野での研究を盛んにした一つの要因として、ロラン・バルトゥール Roland Barthes の『昔話の構造 分析序説 Introduction à l'analyse structurale des récits』（一九六六）があることも忘れることは出来ないであろう。

形態論学派、構造主義学派の昔話の分析に対するかけがえのない貢献を完全に認めた上で、説話の意味の探究をめざそうとする動きも高まり始め、説話の意味するものを探究するためには、テキストを、それらを生み出した文化的、社会的、言語的背景の中に再び戻すべきだという主張も高まっている。この動きの中で、ジュヌヴィエーヴ・カラムーグリオール Geneviève Calame-Griaule 他四名の研究が、固有の言語の中で生み出されたテキストとしての説話にも、社会・文化的背景にも、可変性のメカニズムの探究にも、同等の重要性を付与する民族言語学的方法を確立しようとする共同研究をしている（「意味の可変性と可変性の意味 De la variabilité du sens et du sens de la variabilité」一九八二）。カラムーグリオールは現在、フランス民族学会の中心的研究者の一人であり、右の論文以外にも、『民族学とラング（言語）——ドゴン族のパロー

ル（言） Ethnologie et langue : la parole chez les Dogon』（一九六五）、『アフリカの説話における木のテーマ Le thème de l'arbre dans les Contes africains』（一九六九、一九七〇、一九七四）、『壊れたピョウタン——「二人娘」のアフリカの類話における儀礼的テーマの研究 La calabasse brisée—Etude du thème initiatique dans quelques versions africaines des Deux Filles』（一九七六）等の論文、著書をあらわしている。

この同じ流れの中で、個別の地域文化の中でテキストの歴史的解釈に重点を置き、時間の流れの中での説話の可変性の探究を目ざしている研究者達があり、その一人はエヴ・セール Eve Certeau である。セールは『社会を映すアルザス座——一八九八—一九三九 De théâtre Alsacien miroir d'une société(1898—1939)』（一九七二）、『ストラスプールのアルザス座の魔法昔話』 Les Contes merveilleux du Théâtre Alsacien de Strasbourg』（一九七五）、『アイデンティティのための説話——一八〇〇年から一九八〇年までにアルザスで作られた説話の分析方法 Contes pour l'identité—Méthode pour l'analyse de textes produits en Alsace de 1800 à 1980』（一九八二）他多数の論文を著している。

説話の構造、説話の意味の研究に加えて、説話のパフォーマンスの研究も盛んである。語り手の研究、語りの場の研究に加えて、説話が生産される条件、記憶能力の問題、話者が説話に及ぼす条件、話者の身振り、表情、抑揚の研究、話者の個性と話者が管理している話の特性、語り手と聞き手の関係など、関心は多岐にわたっている。この分野の研究を、記号論的方法を大いに活用して行っている



のがダニエル・ファール Daniel Fabre、ジャック・ラクロワ Jacques Lacroix である。二人はほぼ常に共同研究の形で発表しているが、『オック語(訳注)南仏方言]の説話の口承伝承 La tradition orale du Conte occitan] (二卷、一九七三、一九七四)、『話、談話、作品——語っている語り手 Récit, Discours, Texte = Une Conteuse en action] (一九七九)、『人が語る場——南仏の慣例的語りの習慣 Des lieux où l'on "cause" ..: système institutionnel de l'oralité rituelle occitane] (一九八〇)等の研究を行っている。

また、地理・歴史学派の伝統の中で研究を続け、そこに新しい側面を導入している研究者達も勿論で、その中にマリールーズ・テネーズも位置づけられるのであるが、この分野ではニコール・ベルモン Nicole Belmont の研究にひとごとをよみてみよう。ベルモンはフランスの民間信仰との関係において説話の研究をしているのであるが、儀礼と民間習俗と昔話間の相互干渉性、儀礼と習俗と昔話が相互に説明しあう補完性も考察している。ベルモンは『古代フランスの神話と民間信仰 Mythes et croyances dans l'ancienne France] (一九七三)、『捨てられた子供 L'enfant exposé] (一九八〇)、『フランスの民間習俗と儀礼 Pratiques et rituels Populaires en France] (一九八二)、『AT七二三番のフランスの昔話における神話と民俗 Mythe et folklore à propos du Conte français T. 713] (一九八二)等の著書、論文を発表している。

説話そのものの文学的研究、文体論的研究も沢山なされているが、民間説話が文学に及ぼした影響に関する研究は枚挙にいとまがないほどである。一、二例挙げてみると、ジャン・シャルル・ペヤン

Jean Charles Payen の『アーサー王物語に深く根ざす民間伝承 L'enracinement folklorique du roman arthurien] (一九七八)、クロード・ルクトゥー Claude Lecouteux の『メリュジーヌ伝説の構造 La structure des légendes mélusiniennes] (一九七八)、『メリュジーヌと白鳥の騎士 Mélusine et le Chevalier au cygne] (一九八二)等である。

これらの研究のかたわらで、ピエール・プロションの後を受けて行商人文学と民間伝承話の研究に邁進しているのがジュヌヴィエーヴ・ボレーム Geneviève Bollème だ。『一七・一八世紀の民間層 Les almanachs populaires aux XVIIe et XVIIIe siècles] (一九六九)、『青表紙文庫——一六世紀から一九世紀に至る間のフランスの民間文学 La bibliothèque bleue—La littérature Populaire en France du XVIe au XIX siècle] (一九七一)、『青表紙本——民間文学選集 La bible bleue—anthologie d'une littérature Populaire] (一九七五)等を著している。

次に口承文芸研究の促進と発展に不可欠な研究機関、機関誌の今日の状況を概観して見ると、フランス民族学会、国立民俗博物館 Musée National des arts et traditions Populaires、パリの国立科学研究所 Centre National de la Recherche Scientifique 内にある、口承文芸のための言語・文化研究室 Laboratoire des Langues et Civilisations à Tradition orale、社会人類学研究室 Laboratoire d'Anthropologie sociale その他いくつかの研究室が口承文芸研究の中心である。主たる機関誌は、『フランス民族学 Ethnologie Française]、民間芸術と民間信仰 Arts et traditions Populaires]

「口承文芸手帳 Cahiers de Littérature orale」等である。そして国立科学研究所が各地方に出先機関を持っていて、地方の諸大学との協力のもとに、各地域の口承文芸研究の中心になっている。従って研究発表の場も、各地で様々な形をとっているが、一般に各大学の関係部門の紀要であることが多い。例えばアルザス州を例にとってみると、ストラスブール人文科学大学が「東部フランス社会学誌 *Revue des Sciences Sociales de France de l'Est*」を、その大学の紀要なのであるが、国立科学研究所と国立文学センターとの共同で発行しており、この大学紀要にエヴ・セル、マリノエル・ドゥニ Marie-Noëlle Denis 等の国立科学研究所員が論文を発表している。従って、民間説話は非常に学際的な研究対象である。従って、「宗教社会学文書 Archives de sciences sociales des religions」、「教育学ファイル Dossiers pédagogiques」その他、人類学、哲学等多分野の研究誌も発表の場となっている。

学会で大規模なものは、一九八二年三月に、パリの国立科学研究所で、「国立科学研究所、国際学会、説話、何故? いかに? Colloques internationaux du C. N. R. S. — Le Conte pourquoï? comment?」が、同じく一九八二年五月にアンジェ大学で「フランス西部の言語」と口承文芸 Université d'Angers — Langue et Littérature Orales dans l'Ouest de la France」と題された学会が開催されている。

最後に、口承文芸研究が大学の中でどのよう位置づけられているかについてひとこと触れてみると、フランスで口承文芸研究が一つの学問分野として自立し、認められたのはほぼ二十年前といわれているが、いまだ大学内で一つの学科を獲得するには至っていない。

一般教養科目中の自由選択科目かゼミナールにとどまっている。しかし大学で口承文芸を講義出来る教員の数は、フランス全土で見ると、かなりいるといわれている。

(ながの・あきこ／東洋大学教授)